

# 文化交流に立ちはだかるもの—ことばをめぐる文化の壁

藤 田 悟

## 1.

人は基本的に自分（たち）がフツーであると思っている。自己を基準に他者を見る。それ以外に方法があろうか？「タガメやカメムシを食べるなんて信じられない！」<sup>1</sup>と日本人が言え、<sup>2</sup>「タコを、それもマナで食べるなんてそんなおそろしいことを！」とか「ウナギを日本人は好きだそうだ！」とか「生卵を食べるなんて健康に悪いに決まっているのに！」とか言う米国人がいる。

人は自分が生まれ育った文化に支えられ、縛られている。ある程度のサイズの集団によって当たり前のこととしてほぼ無意識的に共有されている行動様式や考え方で、そうでなければならぬ合理的説明が見つからないものを、とりあえず「文化」と呼ぶ。集団性、無意識性、恣意性をもって「文化」を定義しておこう。学生に聞いたところによると、茨城県では、大学イモを食事のおかずとして出す家庭と、おやつ・スナックとして食する家庭が混在しているらしい。「みんなそうじゃなかったんですか？」という驚きというか気づきが自分の文化を客体化する出発点になる。

本稿は、ことばにまつわる文化的成分をいろいろな角度から検討することが課題である。さまざまな違いを理解することで文化交流は円滑に運ぶ。しかし、すべての違いを理解してから文化交流に望むというわけにはいかない。どこまで違うのかあらかじめわかっているわけではないのだ。むしろ文化交流を進めていく中で違いが明らかになっていくだろうというほうがまっとうな心構えであろう。

言語には少なくとも一定程度の文化的特性が含有されているという本稿の基本的立場からすると、言語（日本語）によって言語と文化の問題を論じることが根本的な矛盾を孕んだ営みとなる。言語も文化も絶え間なく変容の中にあるということを認めるならさらに危うさは増幅される。動体視力を鍛えなければならない。

具体的事実から出発すること、具体的事実につねに立ち返りつつ、日常言語のレベルから不必要に飛翔することなく、考察を進めていきたい。

## 2. 言語運用の実際から

まずは言葉が実際に使われる場面で観察される違い、言語運用における差異について考える。これは、言語の問題プロパーというより、当該言語の使われる社会についての観察でもある。

### 2-1. 話すこと・聞くこと

米国中西部の小さな私立大学でのこと。1989年から1990年にかけて筆者は客員教員（visiting professor）として「異文化理解」に関する授業を担当する機会があった。「教育

を比較する」というセミナーを開講した。10人ほどの学生が登録。コースの前半では日本と米国の高校についての書籍を読みながら討論、概要を理解したところでおのおのの関心があるテーマでレポートを書いてもらうことにした。ペーパーを書くための指導としては標準的なやり方として、まず、個人個人に大づかみにテーマを出してもらい、じょじょに絞りながら資料を紹介したり、論点を整理できるようにガイドするということになる。授業のこの部分の時間は、教員と個々の学生のやり取りが他の学生の面前で続くことになる。日本の大学になれていた筆者は当然のことながら、このやり取りの「劇場効果」を意識して行っていた。つまり、他の学生にとっても役立ちそうなコメントを含めて、実際には1対1のやり取りであっても、1対他の教育効果を見込んで行っていたのだった。10人くらいの学生でも、関心の持ちようにはかなりの共通性が出てくるもので、「エコロジーと教育」を調べたいというのがいるかと思えば、「自然科学教育」を比較したいというのも出てくる。そこで、「Henryがやりたいと言っていたことと、Zitaのテーマは関係あるから相談してみるといい、資料をシェアするといいでしょう」とサジェストしたりする。しかし、その学生はどちらもキョトンとしている。アレッ！と思って気がついたのは、1対1のやり取りはあくまでも1対1であって、そのふたり以外の人は「圏外」にいて、全く聞いていなかったのだった。たしかに、他の人が教員と話しているときに別の人は、自分の番が回ってきたら何を言おうかと考えたりメモしたり、単に待っていたりしていたのだ。そのことに気がついてからは、聞くことに気を向けてもらうべくいろいろな技を使ってみたのだけれど、ともかく、聞くことにはそれほどの関心を向けられないけれども、自分が発言することには非常な努力をする人々であることが強く印象に残った。

そういえば、西洋の教育の理想型は1対1であって、近代化の過程で普通教育の導入とともにやむを得ず、複数の人間を教室に収容するようになったのだった。

## 2-2. 理解すること・発言すること

1980年代の後半、登校拒否の問題が表面化しつつあるころ、日本ではフリースクール運動とかオルタナティブ教育に関心が高まった。英国のA. S. Neillのサマヒル・スクールに関心を寄せる人や米国のホームスクーリングにも関心を示す人々がいた。米国からその分野のスポークスマンが来日することがあって、ガイドや通訳の役を務めたことがある。各地の集会やセミナーをはしごしたものだが、そういうときに「日本の聴衆に関してどんな感想を持ちました？」と聞くと、「話していて反応はそれほどはっきり見えない、質問は非常に少ない、しかし少ない質問や発言は非常に質が高い」と答えが返ってきた。「あなたの米国ではどう？」と聞くと、「反応は大変はっきりしている、質問はやたらと出てくる、しかし自分の言いたいことを言うだけで、こちらの話と本当にかみ合っているものは大変少ない」という。ここからも欧米では、聞くことよりは話すことが、また内容はともかく言葉を多く話すことが重要視されていることがうかがわれる。

上記の米国の田舎の大学では、教員達が教育実践に関して共同研究や情報交換をしていたのだが、painfully reticent students（痛々しいほどに言葉数が少ない学生）をどうしたらディスカッションに巻き込むことが出来るか？が重大なテーマとして考えられていた。（同時に、ディスカッションが盛んに行われているということになっているが、実は「ちゃんとしたディスカッションにはなっていない」というタブーについても語られていた。）

日本だったら、「〇〇ちゃんは発言しないけどちゃんと分かっている」というようなことが当たり前に存在する。「××くんは良く手を上げて発言するけどちょっと……」といささかあきれられている子もいる。日本だったら静かな子ということで別に問題にもならない子どもが米国の教室ではpainfully reticent studentとして特別の注目を集めることになる。

日本の教育指導要領などでは「……に関して知り、理解を深める」と分かることを重視する表現が多いように思う。最近では「表現の能力を養う」ことも謳われる傾向があるが、授業中の学生の発言という面ではそれほどの変化が見られるとは思えない。日本では依然として、理解しているが発言はあまりしない存在が認められているように思える。

授業中に最前列の真ん中に陣取り、ことあるごとに質問や意見を長々と述べる学生がいたりする。日本ではちょっと困り者として扱われる。授業は学生皆のものだから、講義の内容にしっかりかみ合うものであっても、一人であまり長く時間を使ってしまうのはひんしゅくをかう。教員の授業計画が狂ってしまうということもある。しかし、これは日本的な考え方であるらしい。ドイツに留学していた同僚によると、哲学のセミナー（といってもかなり多数の学生がいた）で毎回長々と発言する学生がいて、担当教員はその学生を大変気に入っていた、高く評価していたという。

強烈な言い方をすれば、「発言しない人は存在しない人」とさえ言えるほどに、しゃべらなければ自己の存在も証明できないような言語状況が西欧にはあるように思える。

### 2-3. 武器としてのことば

米国滞在中はテレビをよく見た。そのころ米国では妊娠中絶をめぐる賛否両論がメディアをにぎわせていた。こういう立場の激突するテーマであったからということもあるだろうが、テレビの報道解説番組などで、キャスターがいろいろな場所にいる識者に意見を述べさせる場面は、見ていて見苦しいほどのエキサイトぶりであった。おのおの第1回目の発言はキャスターに促されて始めるのだが、そのうち、賛成派のAの発言が終わらないうちに反対派のBが自己の主張を重ねて話し始める。AがBに譲るかと思うとそうではなく、AはAで話し続ける。合間を見計らってCが割り込む。その重なり合った発言すべてをキャスターが押さえ込んで締めくくる。討論番組のキャスターは大変な力仕事だと思ったものである。日本でも最近はバラエティ番組などでそのような醜い場面があるようだが、決して気持ちの良いものではない。品がないと思う。ただ、米国ではそれなりの専門家だったり科学者だったり宗教者だったりする人々がごく普通に、言葉で人をなぎ倒すような発言の仕方をしていることには大変驚いた。それ以前から米国の教会の牧師の話はまるでPRマンのセールストークのようなが多いと思っていたので、ことばの力が本当に重視される社会なのだとあらためて思い知った。

ここで当然、ディベートについて触れなければなるまい。あるテーマに関して賛否両論の議論（arguments）を作らせてやり合わせる、それをどちらが優勢かポイントをつけて競うのがディベートである。物事を多面的に見る訓練としては有効な気もするし、論理的な展開の訓練にもなるだろう。（多くの場合、論理性よりはウケを狙った発言が多いようだが。）ただ、ディベートの専門家ともなると、「何でもいから結論をください、そのための議論を作りますから」という議論作りのプロになってしまう。弁護士は依頼人の利益をどこまで上手に主張するかが腕の見せどころだから、まさに弁護士にはうってつけの訓

練ではある。ここで注目しておくべきことは、「自分は何を信じるか、何が正しいことか?」といった発想はディベートの訓練にはまったく関与してこないことである。そういった要素は良いディベートには邪魔もののなのだ。

なによりディベートの困ったところは、その過程でどちらも育たない、新たな展開が出てこないということだ。あるのは勝ち負け、それも観客というかジャッジの役回りの人々に自分が強かったと印象づけるのが最終目標なので、パフォーマンスとしての優劣が大きな要素となってくる。討論を経てよりよい結論にたどり着くといったことは考えられない。英語ではaggressive (攻撃的) というのははっきりとプラスイメージの言葉で、compromise (妥協) は非常に嫌がられる言葉だ。

#### 2-4. 語ること・行うこと

政治家で雄弁な人物はめったにいないのが日本だが、欧米では話術が低劣な政治家はほとんどいないのではないと思われる。ギリシャ・ローマの昔から、大演説で歴史が変わったという事例も多いし、歴史に残る名演説が鑑賞されてもいる。米国では政治家になりたかったらスピーチ・クリニックで発音矯正やボイス・トレーニング、さらには身振り手振りの訓練を受けたりするのが多いという。

政治家に限らず、日本の社会組織のトップは能弁とは言えない人が占めていることが多い。米国の企業と日本の企業の交渉ごとの席で、双方3, 4人の出席者がいた。日本側は一番上席の役員が少し発言してあとは直接の担当者が主に発言をして交渉が進んでいった。米国側は発言の多いほうが上席と考えて、肩書きの意味と彼らのイメージする上下関係とが合致せずしばらく困惑していたとのこと。このときの日本側の上席出席者は実はかなりの能弁な人物であったかもしれない。しかし日本的な役割としては、重要などころでひとことふたこと発する程度にしてその他は直接の担当者に任せるのが、正しい役回りと心得ていたのであろう。

香道という日本の伝統文化を研究し、また実践している同僚がいる。最近はヨーロッパに出かけて講演や実演をする機会が増えている。彼によると、ドイツのセミナーの打ち合わせをしているときに、「教授にははじめに解説をしていただいて、実演は別の人によらせましょう。先生にわざわざやっていただくには及びません」といったことを言われたという。日本人から見たら香道の真髄は実技であって、香道の研究はそれとは別の営みである。香道研究と香道の手前はどちらが「上」といった関係ではない。ドイツのセミナーは学術的な場面であったということもあるかもしれないが、研究が実技より「上」とされている気配があったという。

「できるものは行い、できないものは教える」という皮肉な表現もあるけれども、西洋では実際に行うことよりも言葉で意味づけをする、えらそうに解説したり評価したり研究したりすることのほうがワンランク上の行為であるとされている節がある。音楽演奏や演劇などの舞台芸術で批評家の発言に一喜一憂するパフォーマーの姿が思い浮かぶが、あれもことばの力を示しているものと考えられる。

「雄弁は銀、沈黙は金」というのは西洋のことわざということになっているが、「初めに言葉ありき」という方が欧米の言語事情を見る限り、重みがあるように思われる。ことばはパワーである。力であり権力である。

日本の言語文化はどちらかというと、俳句の文化である。ことばよりはその裏にあるものを重視する。ことばをあまり武器として使用しない。ことばの数・音量を重視しない。

## 2-5. 言語表現されるもの・されないもの

「発言しない人は存在しない人」を、言語とその意味の関係に移し替えると、「言語表現されないものは存在しないもの」ということになるだろう。法律や契約の分野ではこの点で非常にシビアにならざるを得ないわけだが、「いくら細かく明記したとしてもすべてを言い尽くせるわけではないだろう」というおもしろい日本語人の言語文化にはつきまとう。

「言語表現されないものは存在しないもの」ではないと主張したのがフロイトであった。意識化され言語化されるこころの動き以外に、その深層におどろおどろしい心的世界が存在するというフロイトの「発見」は、日本の言語文化においてはそれほど大きな驚きをもって受け止められるものではなかった。「そんなことわざわざ言うまでもないことでしょう。」しかし、西欧の、とくに宗教色の強い米国ではフロイトの心理学が一般的な通念としてはいまだに異端の臭気をはなつ危険な学説とされている気配がある。これは、「言語表現されないものは存在しないもの」という言語文化に抵触することからくるものではあるまいか。

知り合いの日本人男性で、米国人女性と結婚して1年で離婚した人がいる。他にも理由はあったのだろうが、毎朝・毎晩「愛しているよ」と言えと要求されるのに辟易したと言っていた。

ことばの運用の場面に関する文化交流論の課題は、このような違いがあるなかで異文化とどのようにコミュニケーションをとるかという点にあるわけだが、ここでは社会生活のなかで言語行為の占める位置が個別の言語（あるいは言語社会）によって異なっている可能性が強いという事実をおさえておくにとどめる。

## 3. 日本語表記の問題

日本語は表記法に関して世界で一番複雑な言語であると断言できる。

- ① 漢字という表意文字を用いる（これは中国語も同じ）
- ② 一つの漢字に複数の読み方がある（「日」を「にち」「ひ」「び」「か」「じつ」「に」などと読む）
- ③ 一つのことば（のようなもの）を複数の漢字で表記する（暑い、熱い、厚い……）
- ④ ひらがな、カタカナという表音文字を併用する
- ⑤ さらに最近ではアルファベットも散見される
- ⑥ ある語を漢字で表記するかかなで表記するかにある程度の自由度があり、その違いによってニュアンスに違いが生じることもある
- ⑦ 固有名詞の読み方は規則性が認めにくいものも多い（東海林、服部、五十嵐、九（いちじく）、六合（くに）……）

世界の主要言語（言語人口がある程度以上の言語）を見るかぎり、表意文字を使用しているのは中国語と日本語だけで、中国語は基本的に一つの文字の発音は一義的に決まっている。漢字の数が最低1万は必要とのことで、この点では記憶力にかかる負担はかなり大



きい。しかし、日本語の場合の②から⑦のような曖昧模糊とした配慮を必要とするものではない。

日本語の場合、「日本」を「にほん」と読むか「にっぽん」と読むかというところからはじまって、個人の自由裁量に任されているというか、統一見解が形成されていないというか、「外国語」としての日本語学習者としては「はっきりさせてほしい!」と思うところではないか。「存在」を知り合いのご老人は「ぞんざい」と発音する。どうも仏教用語か何かではそのように発音するらしい。筆者は「情緒」を「じょうしょ」と発音しないと気がすまないのだが、相手にちょっと変な顔をされることがある。「市場価格」を「いちばかかく」と発音して『資本論』を論じる知り合いがいた。どうしてだか分からないがみな笑いのものになった。

このように、日本語はじつに多くのあいまいさを秘めたまま、「中央」の統制もなしに皆が便利に利用している。また、(これはどの言語においても程度の差はあれ言えることだが)時代によってじょじょに変化し続けている。

#### 4. 母語話者にとってはあつたりまえの日本語だが

「ことばの壁」を語るときには当然のこととして、言語Aと言語Bの違いということが問題となる。その壁を乗り越えようとする試みのひとつが「外国語」学習である。日本語を母語としない人が日本語を学ぶのはずいぶんと苦勞を伴う。といっても韓国語話者が日本語を学ぶほうがヨーロッパの諸言語を母語とする人よりは楽であろうとか、トルコ系の中央アジアの言語を母語とする人も欧米人ほどには苦勞しないらしいといった違いはあるだろう。

ともかく日本語人にとっては当たり前の日本語だが、他の言語を母語とする人々にとっては、大変に厄介な言語だということに気づくことは、文化交流の第一歩といえよう。

新しい言語に出会ったときに、ある種の規則性を見つけられることができると、扱いやすい。

日本語人にとってはあつたりまえのことなのだが、

「1本」を「いっぽん」

「2本」を「にほん」

「3本」を「さんぽん」

と「本」に当たる部分をさまざまに発音するのはなぜか?と学習者はいぶかしがるのではないか? これはほぼ規則的に説明できそうな例である。英語でいえば、a lemon and an appleの使い分け程度の簡単な規則で説明できるだろう。

「4時4分」の読み方(\*の印がついたものは「正しくない」ことを示す。)

*よんじ	よんぶん (よんふん)
*しじ	*しぶん
よじ	*よぶん

## 「4月4日」の読み方

*よんがつ しがつ *よがつ	*よんにち *しにち *よにち よっか
----------------------	------------------------------

## 「9時9分」の読み方

*きゅうじ くじ	きゅうふん *くふん
-------------	---------------

なぜ、「4時4分」を「よんじよぶん」と読んではいけないのか？ 日本語学習者はそういう疑問を持つだろう。これに簡単に答えられる日本語人はいないだろう。これらは、もしかすると歴史的いきさつなどから説明できる部分もあるのかもしれない。しかし日本語人にとっては使い分け（発音の区別）を意識したりすることがないほど自動的なプロセスとなっているものが、日本語人以外が日本語を学ぶときには（少なくとも初歩の段階では）、「これは不規則な振る舞いをする注意事項だ」と意識しなければならないことに変わりはない。

100円	ひゃくえん	vs.	*いっびゃくえん
1000円	せんえん	vs.	いっせんえん
10,000円	*まんえん	vs.	いちまんえん
100,000円	じゅうまんえん	vs.	*いちじゅうまんえん
1,000,000円	ひゃくまんえん	vs.	*いっびゃくまんえん
10,000,000円	*せんまんえん	vs.	いっせんまんえん

これらの数字の読み方に関する例は、規則的な説明は一部を除きたぶん不可能で、言語上の個別的な決まりと考えられる。\*印つきの表現がなぜあり得ないのか、合理的な説明を見つけることはできそうにない。規則的な説明を受け付けない部分は記憶力に負担をかけて覚えなければならない。

「鉛筆が一本、犬が一匹、船が一艘（一隻）、本が一冊、車が一台、紙が一枚、牛が一頭」……

これなどは英・独・仏語などの話者にとっては自分たちの言葉では単に数字を入れるだけなのに対し、いちいち単位語を覚えなければならないので、戸惑うに違いない。

私達のなじみのある英語ではほとんど特別に配慮する必要のないこれらの項目に、日本語ではかなり手の込んだことをしていることが分かる。こういう例を見ていると、日本語を母語にしていよかったと思う。とはいえ、どの言語を母語として育ったとしても、母語の規則的な部分も変則的な部分も当然のこととして身についてしまうのだし、それぞれ

の言語に込み入ったところはあるのだろうから、これは日本語人としての筆者の勝手な思い込みかもしれない。

ここで強調しておきたいのは、日本語人にとってはここで見た事例はなんら特別に気になるほどのことでない、明々白々なことがらだが、外部の目から眺めてみると一筋縄ではいかないけっこう複雑怪奇なことをしているのだということである。

これは日本語に限ったことではない。世界に7000もの言語があるとされているが、そのひとつひとつに、それぞれの話者から見れば当たり前でしかないが、外の目から見れば同じように複雑怪奇な事情が詰まっているはずなのだ。

### 5-1. アナログとデジタル

言語によって世界の切り分け方が異なる。

「water」は日本語では「水」と訳すことになっている。しかし、あるものが「water」であっても「水」とは言えないことがある。沸かした湯船に入っているのは「hot water」なので「water」ではあるけれども「水」ではない。「湯」という別の名前がついている。

日本語	英語
水	water
湯	

ここで「水」と「湯」の境目はどこにあるのか？という問題に触れておきたい。結論から言ってしまうと明確な境目などどこにもないのである。しかし一方の極にははっきりと「水」といえるものがあり、対極にははっきりと「湯」といえるものがある。このように事実・実際の現象でははっきりと切れ目を特定することが出来ないのが常態であろう。事実はアナログで連続体を成す。

ところが人間言語の概念はデジタルで離散体である。「お湯は水ではない。」

授業で「日本人とはなにか？」というテーマで議論をする。すると、「国籍」「血縁」「居住地」「生活文化」「言語」などなどさまざまな指標で日本人を定義しようとするのだが、みなが満足する定義には行き着かない。「日本国民」ならば、国籍を持っている人・日本国のパスポートをとれる人ということではっきりしている。しかし「Donald Keeneは日本国籍を持っているけれども日本人とは言えないのではないか」といった意見も出てくるし、「ロシア国籍の日本人」というフィギュアスケートの選手がいるという指摘や、「ダルビッシュは日本人ですよ」という希望的定義が出てきたりする。

人間言語にはこうした曖昧性が必須の要素として含まれているのであって、なにか特別な目的があるときに厳密な定義がなされる。日本政府にしてみれば「国民」を一義的に誤解の余地なく定義する必要があるから、それなりの手続きを持っている。「日本人」も紛らわしいので「日本国民」と同義で使うことがあるのではないだろうか。

普通の人にとっては、「霧（きり）」と「靄（もや）」は「水」と「湯」のように切れ目に線を引くことは出来ない。しかしそれでは、お天気を仕事とする人々は「今年は霧の日が××日あった、去年より少なかった」といった統計処理をすることが出来ない。そこで



視界が1 km未満の時に「霧」といい、それより薄いものを「靄」ということにしている。それでも普通の生活者にとっては、視界が0.9kmか1.1kmかを確かめてから「霧」と「靄」を使い分けるわけではないし、それが「正しくない」使い方でもない。

虹の色はいくつあるか？という問題も、「霧」か「靄」かというのと同様の、デジタルとアナログの格好の実例である。実際の現象として存在するのはグラデーションだ。それをいくつに区切って名前を付けるかが文化によって、言語によって異なる。日本では7色ということになっていて、「赤橙黄緑青藍紫」と名付けられているものだから、虹を見るとそれらの色が見えるように思えてしまう。7色に分けたのはニュートンだという。しかし最近、英米では6色とするのが一般的らしい。

以上の実例から、次の点を確認しておきたい。

- (1) 事実・実際の現象の世界は基本的にアナログで連続体を成している。
- (2) 日常生活の言語は多義性・曖昧性を必須の要素として含んでいる。
- (3) 特定の目的のために定義を施された用語がその専門分野では明確な概念を表す語として用いられる。専門用語を定義とともに新たに作ることもあるが、「霧」と「靄」の場合のように、日常用語に定義を施して使用することもあるので、ある種の混乱を招く可能性がある。

## 5－2. brothers and sisters

英語の小説を日本語に訳しているとする。冒頭に「My brother John has never been to Japan.」とあったとする。さて、これをどのように日本語にするか？ 英語では「brother」と、「兄」であるか「弟」であるか区別せず普通に使われる。しかし、日本語では「私の兄弟のジョンは……」というのも「私の兄あるいは弟のジョンは……」というのもしっくりこない。そこでこういう場合には、小説のどこかで年齢の上下が明らかになるのを待つしかない。そして冒頭に戻って、「私の兄のジョンは……」などすることになる。日本語としての自然さ、話の筋としてはそれで良からう。しかし「My brother John」には年上という意味は含まれていないので、「私の兄のジョンは」と訳してしまって良いものかどうか疑問は残る。

日本語では男女を含めて同じ親の子どもを「兄弟」という。「ご兄弟は何人ですか？」と聞かれて、brothersだけを答えるのは日本語の用法として正しくない。英語にもこの「兄弟」と同じ意味のsiblingという語がないわけではないが、日常的に使われる語ではない。

日本語		英語
きょうだい	兄	brother
	弟	
	姉	sister
	妹	

日本語では同じ親の子どもをすべてまとめて「兄弟」というケースと、男女別・年齢の上下をともに表した「兄・弟・姉・妹」とするケースのふた通りの語彙構造を成している。

英語では、単語の語彙構造としては男女別の表現があるのみだ。

日本語は年齢の上下という区別に敏感な言語らしい。英語は男女の性別に敏感な言語らしい。

### 5-3. 男と女

今度は日本語を英語に訳す作業をしているとしよう。「鈴木さんにぜひお会いになってください。」という文を英語にするとして、「鈴木さん」では男か女か分からない。英文だったら「he」や「she」ですすでに出てきた人物を指すことが多いので、男か女か分からない名前の人でもいずれ分かることが多いのだが、日本語ではそうもいかないことがある。

逆に英語を日本語に訳す場合には、別の悩みが出てくる。Mr. Obama/Miss Obama/Mrs. Obama/Ms Obamaをどう訳し分ければいいのか？（昔から、英語では男性はいつでもMr.なのに、女性はMissとMrs.に区別するなんてひどい言語だと思っていたけれど、だんだんそのおかしさに気がつく人が増えてきて、いまではMsが公認されてきたようだ。）

日本語では「さん」ですましてしまうところを、英語では最低Mr.かMsかの区別を付けるのが普通だとすれば、やはり英語は男女の区別に日本語よりはこだわりのある言語といっていよう。

さらに、西欧語には人称代名詞というものがある。英語ではhe/she/it/theyだ。「鈴木さんにぜひ会って欲しいから連絡してやってください」などと日本語では「彼に」といった表現は抜かしてすますことが多い。英語だったら「…I want you to contact him」などと「him」を欠かしにくい。ここでも「この人は男か女か」について無意識的にはあれ頭の中で演算装置が働いているのだろう。

筆者は英語を苦勞しながらもほぼ実用的に使える程度の英語能力を持っているが、気がつく「he」と「she」を混同して使っていることがある。男女をつねに区別する英語アタマになり切っていないということだろうか。

英語では「人」も「男」もmanであった。「人は自分の親を選べない。」を英語でいえば、「No one can choose his parents.」がたぶん今でも一番普通ではないか。「his」を「one's」にすると、現在ではpolitically correctな表現とされるだろう。こういう問題に気を配る文筆家はいろいろと工夫をしている。人を代名詞で表現する場合、「he/she」を使うとか、また、Jared Diamondのように著書の一章ごとに、「he」と「she」を交互に使っているケースもある（Jared Diamond, 2005, *Collapse—How Societies Choose to Fail or Succeed*, Penguin）。Amartya Senは「人は」という場面では交互にheとsheを使うといった方式を採用している。

日本語		英語	
人	男	man	man
	女		woman

上の表のように、この件に関しては日本語と英語の枠組みに変わりはない。しかし日本語では「人」と「男」は別の語であって、英語では両者を「man」で表す。英語では人間一般の話をしているのか、男性について語っているのか、気をつけないと紛らわしくなる

ことが多い。それを今は、mankindの変わりにhumankindとしたり、chairmanのかわり  
にchairperson/chairとしたり、意識して差別となりそうな用法を回避しようとする努力が  
一部では払われているようだ。

#### 5-4. 人称代名詞

英語の「I」を日本語にすることを考えてみよう。学校では「I」は「わたし」というこ  
とですませてしまうが、「わたくし」「あたし」「ぼく」「じぶん」「おれ」「おら」「わし」  
「わがはい」「せっしゃ」「てまえ」「みども」……まだまだあるような気がする。一人称単  
数の人称代名詞といえば一つしかない西欧語などの話者からしたら、最低でも4～5の  
ニュアンスの異なる語が使われる、というのは面食らうのではないか。しかもどれも使わ  
ないことも多い。「君が好きだよ。」どういう場合にどの表現を使うのが適切なのか、どの  
ように違うのか、はっきりさせて欲しいと思うだろう。

「「I」は「私」と訳します」とすましてしまわずに、言語表現に注目するのであれば、  
日本語なら10以上の単語で表されることがらが英語ではたったの一つですまされてしまう  
ことの不思議さに思いを巡らしたいものだ。

ハワイ語では、「私たち」が4通りに区別されるという。<sup>2</sup> まず、二人（双数）か三人以  
上（複数）かの区別があり、話し相手を含むか含まないかで区別される。このことばの話  
者の頭の中では、「we」一つですましてしまう英語話者とは違った演算のプロセスがある  
と考えざるを得ない。

	相手を含む	相手を含まない
双数	kaua	maua
複数	kakou	makou

#### 5-5. 「こ・そ・あ・ど」

日本語の「こ・そ・あ・ど」がどのように使い分けられているか？ 普通の日本語人は、  
正しく使い分けしているけれども、それを整然と説明できるとは限らない。

「これ」は話者に近いもの

「それ」は話し相手に近いもの

「あれ」はどちらからも遠いもの

これは英語の「this」「it」「that」に対応しないことに注意が必要だ。英語では話者に近  
いものをthis、話者から遠いものをthat、itは距離に関わらず既知のものを指すのに用いら  
れる。「それ」を正しく英語に訳すことが可能だとは思えない。

#### 5-6. 所有権

青木春夫によれば、アメリカン・インディアン・ネズパースという言葉では、「わたし  
は馬を見る」ということを言う場合に、その馬の所有者が問題になるという。持ち主がわ  
かっているか、わかっている場合にはそれは話し手のものであるかという区別によって、  
3通りの表現になる。<sup>3</sup>

「こういった点をながめると、ユーロク的なお金や所有権に敏感な民族性と、所有権を一  
つ一つ明らかにしなくてはならない言語構造の間には、何らかの関係があるかもしれな

い。ただし、言語が勘定高いから文化がお金にうるさくなったのか、文化形態がガメツクできているから、ことばまでせちがらなくなったのか、そのあたりは鶏が先か卵が原因なのかという問題同様、簡単にはかたづかないのかもしれない。」(p.203)

西欧語では人物が出てくると男か女かをほぼ義務的に標示しなければならないことをすでに見た。ここから男女差別的な社会だからこのような言語になったとか、このような言語だから男女差別的な社会になったとか、結論づけることができるだろうか？ 関係ありそうな気もしないではないが、直結させて考えるのには少々無理であろう。言語の変化と社会事情の変化が時間的に足並みをそろえているとは必ずしも思えないからだ。

ある区別を義務的に標示するという特徴から確実に言えることは、その言語を使うときに頭の中でその区別を言語的演算の要素として取り扱っているということであって、それが差別的な意味合いを持つかどうかは別問題だろう。

### 5-7. 確実性

次にR.M.W Dixonが取りあげている「確実性」について考えたい。「確実性」というのは、ある言明について、それがどれほど確実なものであるか、どのような根拠にもとづいているかを義務的に標示しなければならないという文法的特徴である。コロンビアとブラジルにまたがった地域のある言語では、「話者が自分で見たこと」「誰かに聞いたこと」「推測したこと」「思っていること」「勘で察知したこと」を区別しなければ「あのネズミがチーズを食べた」ということも言えないのだという。この文法的区別は「バルカン諸語、チベット-ビルマ言語、日本語古語（現代日本語からはほとんど失われている）、北アメリカのいくつかの言語、南アメリカのアンデス山中やアマゾン流域の多くの言語など」にみられるという。<sup>4</sup>

Dixonの指摘で注目すべきは、いわゆる「未開」の言語の方が、近代化した社会の言語より複雑な人間関係・社会関係を表現する細やかな語彙や表現に富んでいるという点だ。

文明的に発達していない人々の言語が減びたとしても人類にとってそれほどの損失にはならないだろうというおおかたの見方に対してDixonは言う——「こういう形の反応にはいくつかの思い違いが見て取れる。第一は、物質的に限られた文化を持つ人々はそれに比例して貧弱な言語を持っているに違いない、という思い込み。事実はしばしば逆だ。小さい部族集団は普通、分けされた人間関係や共同義務のような明瞭なシステムを伴った複雑な社会構造を持つ。対照的に、都市の住民の社会ネットワークは退化しており、単純といっても良いようなものだ。」(p.164)

「……どの言語も、他の言語と異なる音韻的、形態的、統語的、意味的構造を持っている。あらゆる言語を通してみられる多様な可能性を研究することによってのみ、我々は、言語行動に関わる、人間の脳の働きの概略をつかむことができる。ほとんど知られていない言語の中で意味がどういう体系をなしているかを調査することにより、意味構造の何らかの普遍的な特徴が明らかになったり現代の問題の解決の糸口となるような何か新しい思考法が発展したりすることがある。」(p.162)

以上を要するに、おのおのの言語はそれぞれにこだわり方が異なるということが出来る。どの特徴に着目して世界を切り分けるか、その着目点に多様な変異が見られるという

ことである。物の数ということかというと、日本語や中国語、韓国語はあまりこだわりがない。英語や西欧語では単数・複数にこだわるものが多い。ハワイ語ではさらに双数と複数という区別がある。英語など西欧の言語では人物の性別にかなりのこだわりを示している。日本語では自分を指す表現（相手を指す表現も）が多数存在し、自分と社会の関係の持ち方に応じて微妙な使い分けが用意されている。ハワイ語では、話し相手の位置を確認しないことには「私たち」にあたる表現を使い分けることが出来ない。日本語では、対象物と話し相手の位置関係を考慮して「こ・そ・あ・ど」を使い分ける。これに対し、西欧の言語では話し相手の位置によって表現が変わるということはないように思われる。

言語Aの話者と言語Bの話者がおのおのの言語を使っているとき、頭（こころ？）の中でバックグラウンドのプロセスとして行われている心的演算はこの節で少し検討しようなさまざまな点で異なるものとなっているだろうといえる。

## 6. 翻訳可能性

次に、翻訳可能性について検討しておこう。翻訳は文化交流のテーマとして重要な一角を占めている。また、言語文化の壁を超えるという問題とも直結するテーマだ。

日本語では「兄弟」と一語で表現するところを英語ではbrothers and sistersと連語を使うといった違いは避けられない。また、あなたのそばにある「それ」の意味内容をそのまま英語にすることも出来るとは思えない。日本語では単数・複数にこだわりがないので、英語の区別を移し替えるには別途工夫が必要になる。ドイツ語では「友人（ひとり）」はFreund（男）ないしはFreundin（女）と性別明記が必要なので、「昨日友だちのうちに泊まったから」といった曖昧さは許されない。ハワイ語の「相手を含む／含まない私たち」といった区別、双数／複数といった区別も日本語や英語ではストレートに移し替えることは出来ないだろう。必要な範囲で補足説明を挿入したりすることになるだろう。

とはいえ、世の中に翻訳書があふれていることを見れば、一定程度の役割は果たしていると考えべきだろう。だいたい論旨が伝わる近似値としての翻訳はじゅうぶん可能であり、必要とされてもいる。

ここでは、どういう文章が翻訳しやすいか？しにくいか？を考えておきたい。

一番難しいのは、詩歌など音の表現力をあてにした要素の強い文章だ。俳句を英語にするなどというのは、全く新たなものを創造するくらいの仕事になる。しかも原作があるわけだからさらに負担は大きい。

なるべく現実と接することの少ない、定義の定まった用語を多用した専門文献が翻訳する上では一番易しい部類に属する。こういった文章はまずもって用語がクリアカットで数も限られるし、論理の展開も奇抜なものはない。だから何語で読んでも、翻訳しても、それほど劣化現象は起きないだろう。法学とか論理学とか数学などが代表例だろう。いわゆる学術文献は程度の差はあれ、この分類に属する。

これの対極にあるように見えて、やはり翻訳しやすいのは、機械やパソコンのマニュアルのような文章だ。文章としては分かりづらいものが多いが、翻訳する上では目的がはっきりしているだけに、単純明快だ。

以上3種の間に大きな領域が広がっている。いつくかピンポイントで難易度のランク付



けをしておく。

社会時評や論説文は、その書かれた時代・社会の周辺知識が豊富でないとつまずきかねない。しかし、文章としてはある種パブリックな言説であるから、ストレートな扱いが可能で、それほど文体的特徴がどうのということもない。小説やエッセイよりは味わいに配慮する必要もないので楽に訳すことが出来よう。

いわゆる文学が結局はかなり難易度の高い翻訳作業を要求することになる。英語を日本語にするとすれば、「I」をどうするか（逆の場合も大変だが）ということからはじめて、全体の雰囲気をごくほど移せるか、文体にも気を配らなければならない。生活の細部が描かれていたりすると、それが文化的な特徴を色濃く持っている場合も多い。それをどこまで移し替えられるかがチャレンジということだ。

SFと推理小説では翻訳自体は前者の方が易しいと考える。理由は、SFは理念で構築されているからだ。ファンタジー系のものになると奇想天外な部分も出てくるが、その世界が了解できさえすれば、あとはその世界のルールで展開していくことになる。推理小説は、実際にあり得るストーリーという点では想像力にかかる負担は少ないが、ワナが仕掛けてあったり、さりげない細部に鍵が隠れていたりするので、そういう部分を正確に読み取り別の言語で再現するのは神経を使う仕事になる。

## 7. 人は言語で考える？

個別言語には、世界を切り分ける方式に様々な違いがあることが分かった。次に検討すべきは、人間は言語なしに考えられるか？という問いである。

「考える」ということばの意味が問題になるが、比較的に広い意味で使うことにすると、絵を描いたり、音楽を作曲・演奏したり、踊りを舞うときには、ある種の非言語的な思考回路が働いているかもしれないという気がする。あるいは、日向ぼっこをしてうつらうつらと幸福感に浸るときや、大好物の食べ物を一心に味わうとき、人は非言語的な思考をしているのかもしれない。

しかし、ことばなしには明日の予定を整理することも、対立する見解を頭の中で戦わせることも、将来の夢をはっきりとさせることも、本当はやりたくないことを自分にやらせるように納得させることも……非常に広範な心的活動が不可能になることは明らかであろう。

個別言語には世界を切り分ける多様な方式があり、人は言語によって思考するとすれば、言語Aを使う人と言語Bを使う人のものの考え方に何らかの違いが生じることはじゅうぶんに考えられる。

言語は人の「言いたいこと」をそのまま流し込むことの出来る中立的な容器ではないということだ。「言いたいこと」自体が個別の言語によって支えられ・縛られているのだ。個別言語は人が世界を見るときに必要とする色眼鏡と言ってもよい。言語という眼鏡はいずれ必要で、おのおの違った色をしている。

日本語の「甘え」を日本独特のものとしてとらえ、非日本人にも分かるようなかたちで説明しようとして苦労したのは土居健郎だ。ある言語表現が存在することで、言語以前の思念とでもいったものが、その表現を核として結晶するというようなプロセスが存在する



と思われる。西洋人でも、日本人から見れば甘えと見える振る舞いをする人間は多く存在する。だが、それは日本語の「甘え」の意味的諸要素の配合具合にぴったりと合った表現を持たないため、「甘え」（と同等の概念＝表現）として定着して認知されることがないといえそうだ。<sup>5</sup>

## 8. 言語の多様性

6000とも7000とも言われる世界の人間言語だが、Michael Krauss (1992) は今世紀 (21世紀) 中に楽観的に見てもその半分は死滅するだろう、シビアナ見方をする生き残るのが10%程度だろうと予測した。<sup>6</sup>

20年後の今年 (2012年)、Gary F. SimonsとM.Paul Lewis (2012) はその後のより洗練された分類方式と追加データにより、Kraussの予測よりは死亡率が低くなるだろうと推定している。「一方の極では、オーストラリア、カナダ、合衆国の言語の70%が消滅したか瀕死の状態にある。他方の極では、サハラ以南のアフリカの言語のうち10%未満が消滅したか瀕死の状態にあるに過ぎない。世界全体では現在使われている言語のうち19%がそれを学ぶ子どもがいない状態である。」<sup>7</sup>

Kraussの誤算の原因は、今になってみれば、アメリカ大陸、オーストラリアといった死亡率の高い地域を中心としたデータから全体像を描いてしまったことによるようだ。地域によって死亡率に開きがあるのは、SimonsとLewisが紹介しているMufweneの研究 (未見) によれば、植民地化のタイプによるものという。彼は植民地化のタイプを「交易型 (trading)」「略奪型 (exploitation)」「入植型 (settlement)」に分け、第3のタイプの植民地支配がなされたところで、言語の死亡率が際立って高いと興味深い指摘をしている。Cécile B. VigourouxとSalikoko S. Mufwene (2008) にも同様の趣旨がみられる。<sup>8</sup>

自然界では「生物多様性の維持」が大きなテーマとして注目を集めている。人間の言語の多様性は、人間の思考や想像力の羽ばたき方の幅広さを保障するものとして、ぜひとも維持したいものである。言語が死滅するという事態は、ひとつの世界観がこの世から姿を消すということである。日本語人であれば母語である日本語がなくなるということを想像してみると、ことの重大さが感じられるだろう。

## 9. 言語における自由とは？

ことばは人の思考をサポートするものであると同時に縛るものであることを見てきた。では、言語Aの話者はその言語の提供する思考パターン＝言語文化にどこまで縛られるものなのか？ 自分の母語の思考パターン＝言語文化を超越して他の言語を母語とする人と真に出会うことはできるのか？ つまり言語における自由とは何か？ この問題を最後に検討することにする。

まず最初に、ことばはいかに変化するかというテーマに簡単に触れておく。それを受けて、個人がことばを使ううえで自由がどこに見出し得るかを考える。

「食べられる」を「食べれる」、「着られる」を「着れる」ということが最近増えてきている。現在では職業としてメディアに登場する人たちも頻繁に使っているので、30年もすると完全に優勢な形態として定着するかもしれない。これは誰かの意思によって起こりつ

つある変化とは考えにくい。日本語の規則の一部が変化しようとしているのだろう。英語（いわゆるBritish English）の歴史の中で、[e:]の音が[eɪ]に変化したことがあるが、それに近い変化といえるのだろう。他言語（他方言）の影響もあったかもしれないが、誰かが意図したものではなく、「言語の自然」の力が働いているとでも考えるしかなかろう。

日本の近代化の過程でさまざまな漢語が作られた。明治の思想家・西周が「哲学」「芸術」「理性」「化学」「技術」などを作ったことはあまねく知られていよう。<sup>9</sup> このように作ったのは誰でいつ作られたかまで特定できるものも多い。その中には現在では一般に使用されないものもあるが、現在の日本語の語彙リストの無くてはならないメンバーとなっているものも多い。個人の発意がなければ「哲学」などの単語が現在広く使われることはなかったであろうが、日本語の語彙リストに定着したのは個人の創意ではない。日本語という言葉コミュニティの総意というべきだろう。

ここで注意したいのは、「外圧」がかなりの程度作用していたことである。西洋の文献を日本語に翻訳する必要に迫られ、その過程で多くの新語が作られた。ある内容を表したいのだが、それに合致する日本語表現がない。それを表すべく既存の漢字の複合で新語を作ったというわけだ。このとき、その人物は日本語の枠の外で思考していたといえるだろう。それ以前にも日本語は漢書から多数の語彙を移入している過去があるわけで、それらが渾然一体となって現在の日本語語彙を形成しているわけだ。

同じようなことが英語の「Ms」についても言える。与えられている英語の語彙では、「Mr.」と同等の女性バージョンがない。この不都合に気がつくのには英語以外を知っている必要はない。そこで、単に「Mr.」も「Miss」も「Mrs.」も付けずに名前だけを使うこともあり得た。でも、それよりは「Ms」と新語を登場させるほうが当時のフェミニズムの風潮としてはデモンストレーション効果もあったということではないか。ここでも、英語の与える思考の枠組みを超えて「Ms」の必要を発意した、それが広く受け入れられ一般的な語彙となりつつあるということだろう。

日本語でほぼ定着した感があるがまだ支配的形態になりきっていないのが「母語」ということばだ。まだ新聞記事でも「母国語」ということばも目にする。ほとんどの日本人にとって日本語が「母国語」であるだろう。しかし在日外国人の4世にとっては、「第一言語＝母語」は日本語だが、これを「母国語」というわけにはいかない。インドのベンガル州で生まれ第一言語がベンガル語の人にとって、ベンガル語は「母語」だが「母国語」ではない。ある時点で「mother tongue」（あるいはそれに当る西洋語）を「母国語」と訳してしまったのだろうが、原語には「国」の意味要素がないにも関わらず、「一つの国に一つの言語」という思い込みによる日本の特殊事情を普遍化して「国」の文字を入れてしまった気配がある。

「foreign language」も「外国語」と訳すことになっている。しかし上記のベンガル人にとってヒンズー語はforeign languageだが「外国語」とは言いがたい。「He speaks seven languages.」も「彼は7カ国語を話す」というのが日本語として座りの良い翻訳だ。しかし、これも「国」がわざわざして不必要な意味内容を含有してしまっている。これについては「Ms」のように新語を作るまでもない。「彼は7つの言語を話します」でよい。しかしこの程度の座りのよさからの逸脱も、日本語の用法に関する文化圧力、スタイルの要請

に抗わなくてはできない。「日本語人」「英語人」といった表現も便利なことばだと思うのだが、これまで筆者以外に使った事実をほとんど見たことがない。(ゼロではないと思う。)

「Ms」の発明や「母語」の導入は、大袈裟な想像力を必要とするものとも思えないが、言語によって与えられた規範の窮屈さを突き破り、少しでも使い勝手の良い言語にしてゆこうという努力の成果ということができただろう。意外と勇気が必要なことでもある。

最後に、言語における自由の問題を考えるうえで役に立ちそうな、言語使用の3つのモードというモデルを提示しておく。

- A. 母語話者になるまで
- B. 通常の母語話者の言語使用
- C. 創造的言語使用

Aは母語における修業時代である。子どもが語形変化や語彙の選択で間違いを犯すことがある。実用目的ではなく最近覚えた表現を一心に繰り返したりする。人間は生まれながらに人間言語を話せるようになるモトの能力をそなえていると思われるが、生まれた環境の言語刺激によってその能力が特定の言語能力として花開く。その過程をAモードといおう。10歳程度になると文法・意味構造の大枠はでき上がっていると考えられる。それでも複雑な文型や「難しい」語彙を使いこなす、書記法を身につけるのは修練と学習が必要になる。

Bは、ほぼでき上がった言語能力を、規則に則って従順に使用している段階である。与えられた言語表現の可能性に満足して縦横に活用する。このモードでは、実践能力の慣性の法則が働く。慣れることでスムーズな言語運用が行える。例えば日本語には、「以下:未満」という表現があるが、「以上:？」とmore thanを表すことばがない。そういった不便さに気づくことなく、文法や語彙ばかりでなく、言い回しのレベルまで「前例を踏襲」する度合いが高くなると、「自分の頭を使って自分のことばで語りなさい」と言いたくなるような没個性的な言語運用になってしまう。しかしその範囲でも、新たな語彙を学んだりしながら、既存の規則を駆使することで独創的な内容の言語使用がじゅうぶん可能である。

Cのモードでは、反省的契機が重要になってくる。言語の内側から窮屈さを感じたり、外部の目を獲得して言語の現状を変えたいと考えたりする段階である。「Ms」を発意した場合のように当該言語内の使い勝手の悪さから出発することもあるだろうが、「哲学」や「社会」を近代日本語に導入した場合のように「外国語」の影響が見られることも多いだろう。わざと誤解を招くような表現を使うとか、駄洒落やことば遊びもこの段階に属する。

この区別は必ずしも時系列にのったものではない。あくまでも3つのモードであって、同じ人があるときはBで語り次の瞬間にはCで語るということもあるだろう。

自動車の運転に例えれば、Aは免許を取るまで、Bは路上を普通に走る段階、Cは規則を一部無視したり道のないところも走ったりするようなケースということになる。

最近の現象として、「個人情報漏洩 被害者30万人超」といった新聞見出しにみられる「超」の使い方がある。これは、上で指摘した日本語の不備を補う工夫だろう。定着すれば、Cモードで使われ始めた用法がBモードでも使われるようになったことになる。

わが家では、「本猫（ほんびょう）はそれを喜んでいるだろうか？」といった表現が使われる。「本人」では猫を人間扱いしているようで失礼だろうという意図からだが、これはわが家のidiolect/dialect個人語／方言ということになる。今後広がるかどうかはわからない。

以上を要するに、言語の決まりに則ったうえで何を言おうと使用者の自由であるが、言語の決まりを変えるような自由は、個人レベルでは非常に限られるということになる。文法規則は歴史の中では変容するようだが、個人の意思が働くとは考えにくい。語彙に関しては新語を案出し使い始めるのは個人レベルのことだが、言語コミュニティに認知されないことには一般的に使用されるにはいたらないということだ。それでも、詩や文学作品などで限界に挑むことをやめられないのが人間である。

### 10. ことばの壁は超えられるか？

ネズパース語を習得することは人間誰にも可能なことである。なぜならネズパース語も、人間言語としての要件をみたしているからだ。「わたしは馬を見る」というときに、「わたしは（誰のものかわからない）馬を見る」「わたしは（わたしのものである）馬を見る」「わたしは（わたし以外の人のものである）馬を見る」を区別して別様の表現をするネズパース語も、日本語人でも英語人でも中国語人でも学び身につけることができる。

コロンビアとブラジルにまたがる地域で話されることばでは、「確実性」を5通りに区別して表さなければならない。

これらの特徴は前節「言語における自由」でみたような、比較的自由の効く語彙の分野ではないだけに、言語の多様性を維持することの重要性が一層大きくなるといえるだろう。

こうした区別を使い慣れていないわれわれにとっては、めまいを催しそうな頭の動かし方に思えるが、やはり人間の言語であれば、誰にでも身につけることができる。といっても簡単に身につくとは考えられない。日常の簡単な意思疎通だけでも最低数ヶ月その言語に浸かる程度の努力は絶対に必要になるだろう。そうした文化交流の中から、なぜ現在の日本語には「確実性」の区別がないのかといった疑問を抱くことも可能となる。

言語の壁は超えられる。しかしそれにはそれなりの努力が必要だ。その努力は自己を反省的に見つめる契機にもなるとすれば、じゅうぶん価値があるといえるだろう。

- 
- 1 野中健一著『虫食む人々の暮らし』NHKブックス, 2007。Peter Menzel and Faith D'Aluisio, 1998, *Man Eating Bugs---the Art and Science of Eating Insects*, Ten Speed Press
  - 2 <http://hawaiiandictionary.hisurf.com/>
  - 3 青木春夫著『減びゆくことばを追ってーインディアン文化への挽歌』岩波書店, 同時代ライブラリー 331, 1998年。
  - 4 R. M. W. Dixon, 1997, *The Rise and Fall of Languages*, Press Syndicate of the University of Cambridge. (R. M. W. ディクソン著, 大角翠訳『言語の興亡』岩波新書, 2001. p.167. 引用は邦訳による。) 現代日本語にみられる名残りとは、「あのネズミがチーズを食べたそうだ」「あのネズミがチーズを食べたようだ」といった表現だろうか? 「確実性」を義務的に標示しているわけ

ではないので、推測の範囲を出ない。

- 5 土居健郎著『「甘え」の構造』弘文堂, 1971。
- 6 Michael Krauss, 1992, The World's Languages in Crisis, *Language* 68(1)
- 7 Gary F. Simons and M. Paul Lewis, 2012, The world's languages in crisis: A 20-year update, a paper presented at the 26<sup>th</sup> Linguistics Symposium: *Language Death, Endangerment, Documentation, and Revitalization*, University of Wisconsin, Milwaukee, 20-22 October 2011, Last revised: 21 April 2012. p.1. (<http://www.sil.org/~simons/preprint/Wisconsin%20Symposium.pdf>)
- 8 Vigouroux Cécile B. and Salikoko S. Mufwene, 2008, *Globalization and Language Vitality-Perspectives from Africa*, Continuum International Publishing Group
- 9 [http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E5%91%A8\\_\(%E5%95%93%E8%92%99%E5%AE%B6\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E5%91%A8_(%E5%95%93%E8%92%99%E5%AE%B6))

## Cultural Barriers of Languages Confounding International Exchange

FUJITA Satoshi

This paper examines various aspects of cultural barriers that any attempt of international exchange has to encounter in terms of linguistic differences. It starts with fragmentary socio-linguistic observations of the author concerning the position of language in society. It briefly examines the writing system of the Japanese language, which poses great difficulty for those who study Japanese as a foreign language. Other examples are presented to show how complex and idiosyncratic the facts of Japanese appear to foreign learners, whereas they are simply a matter of course for the native speakers. It then tries to decipher cultural implications of color terms, kinship terms, and personal pronouns in a few languages. The notions of ownership and evidentiality are also considered. Other questions to be dealt with are: Are the process of human thinking dependent on the language one uses? How do the linguistic differences affect the work of translation? What does it mean for us to have languages die in various parts of the world? What is freedom in our language use?